

序論 ゾンビを二度殺さないために

岡田尚文

芹澤円

一 歴史あるいは地理的なゾンビ

「ゾンビ」と、まずはカタカナでつぶやいてみよう。英語なら「生ける屍 (living dead)」として知られるこのゾンビに皆さんが抱くイメージはどのようなものだろうか。誰もが思いつくのは、映画に登場するモンスターだろう。あるいはシューティング・ゲームの標的としてのそれだろうか。中には「哲学的ゾンビ」なるものを思い出される方もいるかもしれないし、ゾンビのコスプレをして渋谷の交差点辺りを集団で徘徊している方もいるかもしれない。

それで、皆さんはこう思っていないだろうか。いずれにせよ、それらは皆、自分たちの想像の産物であって、ゾンビなど存在しない、だから怖くもないと。

ところが、ゾンビは実在する。より正確には、それはかつて実在していた——いや、後述するように、もしかしたら私たちも半ば以上ゾンビと化しているのかもしれないが、とりあえずそれは置こう。今、過去形で言った

のは、ゾンビが、西アフリカに由来し西インド諸島のハイチで独自の発展を遂げたブードゥー信仰のただ中で生み出された「存在」だからだ。ブードゥーとは、キリスト教の復活思想と、アフリカから強制的に連れてこられた「黒人」奴隷たちの精霊信仰とがない交ぜになってできたと言われる民間信仰であり、ボコールと呼ばれる呪術師による儀式によって死から復活した人間——実際には、フグ毒によって仮死状態にされ、儀式的に埋葬された後、朦朧状態でプランテーション農業や工場労働に従事させられた人間——を「ゾンビ」と呼称していたのである。

だからそれは確かに存在したし、それらが「奴隷」としての性格をも初めからもっていたことは忘れずにおきたい。とはいえ、とりあえず、私たちがそれを認識したのは、ジョージ・A・ロメロが監督した映画『ゾンビ』（一九七八年）が日本で一九七九年に劇場公開されて以降のことだろう。スクリーン上を闊歩する、いや、群れを成してゆつくりゆつくりと、だが確実に、あたかも私たちの肉を求めるかのようにこちらへこちらへと向かってくる「歩く死体 (walking dead)」としてのゾンビ。それらは、理由はよく分からないが人肉を求めてさまよい、生きたままの人間に噛みつき、銃で撃たれようが刃物で切りつけられようが、頭を碎かれるまでその動きを止めない——仮に首を切られても頭だけで、矛盾を承知で言えば「生きて」いる。その後、この「ロメロ・ゾンビ」を原型とするモンスターは、映画のみならず、徐々にあらゆるメディアを増殖しつつ席卷し、様々な国や地域の文化に影響を与え、今日にいたるわけである。

二 抽象的あるいは思考実験的なゾンビ

さて、本書はゾンビに関する学術論文集である。いま見たような歴史的・地理的文脈から少し離れて、もう少し抽象的な言い方してみよう。ゾンビとは何か。それは意味の「裂け目」そのものである。

例えば、それは死んでいるのに生きている（ように見える）。少なくとも歩いて——近頃の映画やゲームでは猛スピードで走って——いる。考えてみれば、それは死んでいるのだから男も女も関係なくなっているはずである。もはや「彼」も「彼女」もないのだ。あるいは、それは元々「黒人」の奴隷だったはずだ。しかし死んだら「人種」も何もあるまい。いや、私自身、さきほどからゾンビを「それ」と言っているが、そのような呼称は果たして適格なのか。例えば、親しい人の「遺体」を「死体」とは決して呼ばない私たちが、仮にその人がゾンビになって目の前に現れたら、「それ」を何と名指せばよいのか。そう、「それ」には既に意思もないのだから「主体 (subject)」とは呼べない。確かに「死体 (body)」＝「客体＝物 (object)」となってしまうのだが、そうみなすには、「それ」は、あまりにも「人間」臭いのである。

かくの如く、ゾンビなどもう存在しないと分かっているとしても、もしいたとするならば……と、私たちは様々な「想定」をせずにはいられない。いや待てよ。ゾンビは既に死んでいる。そもそも、そんな存在を「殺す」というのも変な話ではないか。あるいは、「それ」を殺す、即ち二度目の死を与えることについて、皆さんは考えたことがあるだろうか。ゲームのキャラクターならまだいいかもしれない。しかし、映画やTVドラマやアニメーションの中の、あなたが感情移入し始めたキャラクターなら。現実には、家族や知人が、ゾンビとなって甦りこちらに向かって来たら。そう、私たちが恐れるのは——いかにメディアの中にしか存在しないとはいえ——一度死んでいるゾンビを今度こそ殺してしまう（二度と起き上がれないようにしてしまう）ことだ。そんな残酷なことは、この世に存在しないのではないだろうか。

たとえ想像上の存在に過ぎないとしても、ゾンビに二度目の死を与えないこと。言い換えれば、一度動き出したゾンビを再び物化 (reobjectify) しないこと。それがハイチに強制的に連れてこられたアフリカ系「奴隷」の信仰の中に「誕生」した存在であることを忘れないこと。よって、例えば、そのことに無自覚なままゾンビを観光誘致（地域おこし）のための「道具」とするような立場については、本書は少なくとも相対化を試み、批判する

ことになるだろう。もちろん、研究のためにも、かかる存在を再搾取しないよう充分注意を払いたい。いかに「面白い」からといって、「○○的ゾンビ」などといい気になって言い回し、その死せる身体を思考実験の道具・場としてしまうことは避けたいのである——そのような行為は「墓荒らし」や「人体（死体）解剖実験」どころか「死姦」に限りなく近づくこととなるだろう。

三 理想的なゾンビ

ゾンビ研究に勤しむ者は、そういうわけで、私たちを含めて、ゾンビを思考実験に駆り立てがちなのだが、それとは裏腹に理想化しがちでもある。なるほど「リビング・デット」とは興味深い存在だ。ここまで述べたように、その身体には生／死、動／静、主体／客体という本来相容れない状態が同居している。さらにそれが死んでいるのなら、死人に男も女もない。ヘテロ・セクシュアルな二項対立的考え方自体を問いに付すわけである。いや、そもそもゾンビに視力がないとするならば、見る／見られる関係、さらにはそれに基づく主体（白人・主人）／客体（非白人・奴隸）関係をも無効化してしまうだろう。

ジェンダー論的な問題に引き付けて考えるとき、ゾンビは視覚的世界、言語的世界には「生きていない」（そこにおいては死んでいる）といえる。言語は視覚によつて大きく影響されており、「見る／見られる」関係は「主体化／客体化」という言葉の作用に直結する。しかし、ゾンビが「生きている」のは「食べる」あるいは「叫ぶ」ことをきっかけとする——主体としてというよりは——「エージェント（行為のきっかけとなる存在）」としてではないだろうか。究極的には、「口」を媒介とする非視覚的・非言語的な「身体と身体」の関係の中に「私たち」を引き戻す存在としてゾンビはあるように思われる。

こうして、ゾンビの身体を合わせ鏡にすることで露呈するのは、むしろ「私たち人間」の身体と、これを統御

しているはずの思考の在り方の限界というわけだ。私たちは言葉に囚われている。だから言語を解さない、視覚に頼らないゾンビの方が人間より優れているのではないのか。実際、互いにいがみ合ってばかりいるのは私たち人間で、ゾンビ同士は決して喧嘩をしないではないか。しかし、ゾンビを「人間」を超える、可能性に満ち溢れた存在——例えば「ポストヒューマン」——だとして担ぎ上げるようなやり方にもまた気を付けたい。なぜなら、そのような理想化は、ゾンビを道具（客体）として搾取する態度と何ら変わらないからである。

四（死） 私たちは既に……

そういう陥穽にはまらないために、私たちが既に半ば以上にゾンビ（的な集団の一員）^{ゾンビ}であることを忘れないようにしたいというのが本書の取るスタンスである。「人外」としてゾンビを排除あるいは称揚する、即ち、学問の題材・対象にして面白がつてみせる（墓を暴いて解剖する）のではなく、自分たちもまたゾンビなのだ、そもそも生と死が相半ばする存在であるがゆえに、見る／見られる、主体／客体、男／女という二項対立的ものの考え方それ自体を「他者でも物でもある私（たち）」自身に投げ返す存在なのだ、という立ち位置から、ゾンビについて論じたいのである。とりあえずは、手垢にまみれた言葉に頼る他ないにしても。

五 本書の構成

さて、編者の問題提起はこれくらいにして、本書に収められた論考を紹介するとしよう。

第一章、岡田による論考は、ジョージ・A・ロメロ監督によるゾンビ映画第一作『ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド』（一九六八年）を取り上げ、スクリーンに投影されるゾンビの身体イメージを検証する。従来の批

評・研究は、精神分析のあるいは社会反映論的観点から、ゾンビやゾンビに溢れた作品世界に、当時のアメリカ社会における集合的意識／無意識、あるいは東西冷戦下のイデオロギーがもたらした過剰な抑圧が反響していると指摘するに留まっている。これに対し、本章は、恐怖映画の中で「怪物」として扱われてきたゾンビの身体イメージそれ自体に注目する。当該作品をD・W・グリフィス監督の『国民の創生』（一九一五年）やJ・ホエール監督の『フランケンシュタイン』（一九三一年）といった作品に接続し、それら作品における「怪物」的人種表象が映画的身体としてのゾンビをより深く理解するための鍵となつてゐることを詳らかにする。

第二章、芹澤による論考は、フェミニズムの観点からも評価を得ているジョージ・A・ロメロ監督の「リビング・デッド」前期三部作を対象とし、ゾンビ集団における「女ゾンビ」（女性が演じるゾンビ）と「男ゾンビ」（男性が演じるゾンビ）の描写され方の違いを分析し再評価する。近年、映画の中の集団ゾンビにあつては、彼ら／彼女らが死人であるが故にジェンダーの差は存在しないという評価がなされてきた。しかし本章では、現実の人間社会、つまり前映画的な段階における役者やエキストラの男女差が映画内のゾンビの在り方にも投影されており、性的不平等もまたそこで再生産されていることを明らかにする。そのため、当該三部作における男女ゾンビの量的・質的な差を、その数や登場時間、食人描写の在り方、道具や武器の用い方、マネキンとの関係性といった観点から比較検証する。

第三章、小澤による論考は、アメリカン・ホラーにおける食人表現——それは「捕食される本能的な恐怖」を表現するものと「人肉を食す倫理・文化的な嫌悪感」を表現するものとに分けられる——をアメリカ大衆社会の変化に照らしつつ分析する。アメリカのみならず、世界的に食人表現を普及させる役割を果たした画期的な作品はロメロの『ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド』であろう。本作で本能的に食人という罪を犯すゾンビという人気キャラクターが創設されたことによって、食人ホラーが大量生産される契機ともなった。その後、トビー・フーパー監督の『悪魔のいけにえ』（一九七四年）のように、人間を家畜同様に屠殺するなど、さらに新し

い食人表現を追求する中で、それが伴う嫌悪感をメインテーマとする作品も制作されることとなる。後の「羊たちの沈黙」シリーズに登場する食人鬼・ハンニバル・レクターのようなアンチヒーローの登場は、こうした食人表現をテーマとしたアメリカン・ホラーの歴史的発展の結果だと言える。

第四章、中里による論考は、十七世紀以来の戦争思想史に鑑みながら、ゾンビ禍の戦争状態の隠喩としての側面を明らかにする。ゾンビ映画において、ゾンビはまず「究極的な非対称の敵」として表象されるが、これはトマス・ホップズからカール・シュミットへという思想史において理解できよう。ゾンビ禍はそこで、人間と異質な「他者」（『ゾンビ』）との戦争の謂となる。しかし、同時にゾンビは「社会に抗する自然」としても表象される。これはジャン・ジャック・ルソーの理論にピエール・クルストルのそれを接続することで理解できるだろう。ゾンビ禍はそこで、土地の私有制度を中核とした人間の社会状態に対する抵抗そのものとなる。畢竟、ゾンビ禍はホップズ・シュミットの「敵対性」とルソー・クルストルの「抵抗性」が拮抗し分ち難く絡み合う暴力表象となるのであり、その具体的な在り様は、ロメロ・ゾンビの動態性の中にこそ見出せるだろう。

第五章、田原による論考は、ロメロ監督作に代表されるゾンビ映画と、コンピュータゲームとの影響関係を検証する。一九九六年にカプコンから発売された『バイオオハザード』では、ロメロの映画のようにゾンビが描かれ、それらが自分を襲ってくるという恐怖をプレイヤーが体験できると言われてきた。つまり、それはロメロ作品との連続性の下に語られてきたのである。本章では、こうした指摘を踏まえつつも、ゲーム『バイオオハザード』が「サバイバル・ホラー」というジャンル名を冠されてきた事実注目し、両者の関係を再考する。ゲーム・プレイヤーが体験させられる「サバイバル」の内実について、ゲーム論、ゾンビ論のみならずジェンダー論の知見をも援用し分析することで、ゲームと映画との決定的な相違を指摘し、しかしその上で、『バイオオハザード』とロメロを別の角度から架橋することを試みる。

第六章、柳井による論考は、ゾンビをめぐる映画三作品、ジョージ・A・ロメロ監督『ゾンビ』、ジョナサン・

レヴィン監督『ウォーム・ボディース』(二〇一三年)、デヴィッド・フレイン監督『CURED キュアード』(二〇一七年)を取り上げ、各作品の表象の在り様を観察しながら、「壁」に象徴される〈隔絶〉と人間とゾンビの〈共存〉について検討する。『ゾンビ』の登場人物四人は、消費を象徴するショッピングモールの「壁」の内側に生きる道を見出すが、彼らによってそこから排除されるゾンビに対して、別の人間集団が「壁」を越えて略奪しにやってくる。そのとき、「壁」は何者に対して意味を持つのかが問われる。ゾンビはまた、〈共存〉という可能性をも喚起する。例えば、『ウォーム・ボディース』における「壁」の崩壊は、〈隔絶〉された「他者」との融和の物語を示している。一方の『CURED キュアード』はウィルス感染＝ゾンビ化からの「回復」を問題とした。そこでは回復者は「他者」化され〈隔絶〉されるのである。

第七章、竹内による論考は、伝統的な人間像あるいは人間中心主義を問い直す文脈においてこそ、ゾンビが登場することに着目する。再生医療や人工知能(AI)の発展により、これまで人間を規定してきた観念やフレームワークはもはや失効しつつある。また、人間のもつ多様性を尊重しようとする現代の潮流では、伝統的な人間像に依って立つ言動は暴力とすら捉えられる。こうした人間性の規定そのものが揺らいでいる事態を、ゾンビという形象は見事に映し出してきた。つまりそこで、ゾンビは人間性の問い直しを促す存在としてのポストヒューマンに比されるのだが、本章では、ジュリエット・ラウロとカレン・エンブリーの論文「ゾンビ宣言」をはじめとする先行研究を丹念に紐解きながら、そのようなゾンビの特徴について整理する。また、ポストヒューマンとしてのゾンビが開く可能性についても、現代の社会課題と絡めながら論じる。

第八章、遠藤による論考は、二〇一〇年代の日本現代文学の中で、生者の脅威にほとんどなり得ない、スプラッタやアクションのような刺激から切り離されたゾンビが描かれている意味を明らかにする。押井守『ゾンビ日記』(二〇一二年)、『ゾンビ日記②』(二〇一五年)と、吉本ばなな『吹上奇譚』(二〇一七―二〇二二年)は、一見したところまったく異質な世界を描いているが、ゾンビ出現によるパニックが既に収束した後、制御できな

い存在としてただそこに居続けるゾンビの姿を描いているという点に共通性を見出すことができる。これらの小説の背景には、二〇一一年に起こった東日本大震災とそれに付随して起こった福島原発事故の影響が色濃く投影されている。プリコラージュ的手法によって造形されたゾンビと、死と生の間で揺れ動く人間との対話の先には、人間身体が経験する恐怖や痛みに向き合う契機が希求されていると考えられる。

第九章、木村による論考では、パンデミックを主題とするドイツ現代小説におけるゾンビ表象を手がかりに、ゾンビというジャンルのな枠組みが語り手の自己理解や現実認識に与える影響を検討する。ローラ・ランドルの『創造の王冠』（二〇二〇年）は、コロナ禍における日常の描写に語り手が構想しているゾンビ・ドラマの内容を差し挟みながら、語り手自身が感染によって変容し、語りの主体が不安定化していく過程を描いている。嗜好や行動の変化はゾンビ化＝主体の変容として表れ、ゾンビという虚構はウィルスおよびその感染という現実を解釈するためのメタファーとして、語りの形式や思考を侵食していく。虚構の語りが現実の語りへとウィルスのように拡がり、感染していくプロセスそのものを「ゾンビ的語り」として捉えることによって、「語り得ないものを語る」という問題とゾンビ表象との関係性を問い直す。

第十章、新井による論考では、韓国内でゾンビ映画の地位を確立したヨン・サンホ監督の『新感染 ファイナル・エクスプレス』（二〇一六年）及び関連作品をコミュニケーション研究の観点から分析し、韓国コミュニケーションのリアリティを読み解く。作品内のゾンビではなく、ゾンビが登場したことによって人々が交わすこととなるコミュニケーションに注目し、これを観察及び確認した上で、実際に日韓で実施された大規模コミュニケーション調査研究の結果と作品内の人々の言動を比較する。また、ゾンビの出現という「非現実」の中でも、韓国コミュニケーションの「リアリティ」が描かれていることを明らかにする。

以上に加え、巻末には批評家の藤田直哉と岡田が登壇したパネル・ディスカッションも採録した。なぜ、ゾンビは歩き出し（映画に登場し）、また最近になって走り出した（あらゆるメディアを席巻するようになった）の

か、皆さんにも一緒に考えてほしい。また、「ゾンビ研究のための文献リスト」、「ゾンビ関連年表」も併せて参照されたい。

繰り返すが、本書は、最終的には私たちの学術的態度そのものを問うゾンビを、私たちもまたゾンビ（様々な局面で生きながら死につつある存在）であるという立場から論じようと試みるものである。実際、私たちはゾンビを「異物」としては決して考えてこなかった。ゾンビは愚かな私たちの、しかし愛すべき似姿であり、私たちの絶望を象りもすれば希望ともなり得るものである。どうしてこれを「他者」と思えようか。私たちが鏡の前に立つとき、「それ」は間違いなくそこに映っており、その視力なき眼で、いや、言葉ならざる叫びを発し、かつ私たちの肉を噛みちぎらんとするその口をもって、こちらの様子を窺っている。

この本を手にとられたゾンビ的な存在としての皆さんと、ここに収められた各論文が扱うテーマを手がかりに、いつの日かゾンビについて——ということは自分たちの集団的在り方について——議論できる日が来ることを願うばかりである。この本自体が、そうした集いの所産に他ならないのだから。

*

本書の出版に際し、令和七年度学習院大学文学会研究成果刊行助成金支給を受けた。なかなか進まない本書の編集作業を陰になり日向になり後押しして下さった水声社の関根慶さん、吉山小百合さんにまずもって感謝を申し上げる。また、最初にこの出版企画を取り次いで下さった井戸亮さんにも御礼を申し上げる。

本書は、「ゾンビ映画を観る会」（二〇一六年）並びに「ゾンビ映画研究会」（二〇一七年）の研究活動の成果を書籍としてまとめたものである（活動の詳細については巻末の「ゾンビ映画研究会全記録」をご覧ください）。最後に、これら研究会を（ホラー映画がお嫌いだったにもかかわらず）主導して下さった大貫敦子先生

（学習院大学名誉教授）、また、会の立ち上げ・運営に尽力して下さった脇なつみさん（同大学大学院身体表象文
化学専攻・元副手）に、私たち二人より、心からの感謝を捧げたい。もちろん、これまで研究会にご参加下さっ
た全ての皆さんにも。